

## Special Essay

## 素人の勧める“ブンガク”小説

脳神経外科学講座 森岡基浩

若い時はよくわからずに“ブンガク小説”なるものを読みまくってしました。今考えても良くわからないと思いながらも読むべきものがブンガク小説だと思いますが、年齢を重ねてきて少しずつ新たに細部がわかるようになるのが文学のようです。

私は文学なるものがわかっているとは口が裂けても言えない人種ですが、中年にさしかかって今まで読んだ文学小説を読み直そうと突然思いました。例えば高校生の時に読んだ川端康成は何故ノーベル賞作家なのかあのままだとわからなかったと思いますが、読み返した時には華麗な文体、感情の襲などという言葉がわいて来るようになっていて自分なりに“うーん”と唸ってしまいました。それでは若い時に読むのは意味が無いのかと言うと全く違います。若い時に感激したところは今でも同じ感動を感じる場所もあり、若い時にはわからなかったところがわかる自分が居ることにも気づきます。自分がそれなりに成長している事もわかりますしずっと変わらない感情があることにも気づきます。

歴史好きの方々が滔々と史実を語られるのはいつも感心しながら拝聴しますがブンガクを読んでもそういった具体的な話はできずいつも困ってしまいます（勿論文学研究をされている方々はそうではないと思います）。おそらく文学が人種、世代、歴史を超えて共通した人間の本质のようなものを相手にしているためにいつまでも語り継がれるのでしょうしそれを伝えるにはやっぱり“読んでみてくれ”としか言えないのでしょう。またその内容は年齢とともにわかってくるものもあるのが“味”なのでしょう。

村上春樹さんを好きな方は多いと思います。“ある作家が読者を魅了する。しかしそこには様々な魅了のパターンがある。、、、読み終えて何ヶ月も何年もたってから突然、まるで後ろ髪を掴むように読者を引き戻していくタイプの作家がいる。僕にとってはスコット・フィッツジェラルドがそうであ

った、、、”（村上春樹：フィッツジェラルド体験）。私は高校生の時は“華麗なるギャツビー”はアメリカの大衆文学だろうと馬鹿にしていたが私のような素人でも村上春樹さんと同じ体験ができるのもブンガクならではないかと思います。

若い人には文学の濫読を、すこし年齢を重ねた人には昔読んだ文学の再読をお勧めします。やはり文学には味がありその存在は大きいものだと感じます。

